

# 平成20年度病虫害発生予察特殊報第2号

平成20年9月1日  
発表：福島県病虫害防除所

病虫害名 アルファルファタコゾウムシ【*Hypera postica* (Gyllenhal)】

寄主植物名（作物名） レンゲ、アルファルファ、ウマゴヤシ、シロツメクサ、  
カラスノエンドウ等のマメ科植物

## 1 発生状況

浜通り南部地域のマメ科雑草に、本種の寄生が認められたとの情報提供を受け、平成20年4月に同地域を調査したところ、2a程度の空き地でカラスノエンドウの葉を加害するゾウムシ類幼虫を少数確認した。採集した幼虫を飼育し羽化させ、成虫を東京農業大学農学部小島弘昭博士に同定を依頼したところ、アルファルファタコゾウムシであることが判明した。

確認地点で5月5半旬には、幼虫はほとんど見られず、成虫は確認できなかった。現在のところ、県内における農作物（レンゲ等）の被害は、確認されていない。

本種は、マメ科牧草を加害するヨーロッパ原産の侵入害虫であり、日本では昭和57年（1982年）に福岡県と沖縄県で初めて発生が確認され、その後、中国、四国、近畿、中部、関東地方と分布域が拡大し、平成14年に栃木県、平成15年には茨城県、群馬県で発生が認められていた。

## 2 形態

成虫： 体長は4.0～6.5mmで、体の表面は灰色がかった褐色の鱗片で覆われ、背中の中央部はより濃い色となっている。

幼虫： 孵化直後は無色透明であり、発育するに伴い緑色を帯び、成熟幼虫は濃緑色となる。成熟幼虫は体長が10mm程度、頭部は黒色で、背中の中央に1本の白い縦線がある。

蛹： 白色、球形でレース状の繭をつくり（直径約6.5mm）その中で蛹になる。繭は、寄生植物の茎葉や枯葉などに包み込まれるように形成される。

## 3 生態

本種の発生回数は、年1回である。気温が上昇する3月頃から孵化し、幼虫はレンゲなどのマメ科植物の茎葉や花を摂食しながら成長する。食害が著しい場合は、草地一面が枯れたように見える。幼虫は4齢を経て繭をつくり蛹化する。羽化後、成虫は約10日ほどマメ科植物の茎葉を摂食し、その後、樹皮下や枯れ草などに移動して休眠（夏眠）する。

幼虫の発生盛期は4月頃、成虫は5月上旬から発生し、5月中旬～6月上旬に盛期となる。成虫は晩秋（11月頃）に休眠から覚め、寄主植物に移動して約1か月間摂食した後、交尾、産卵する。産卵は12月から5月上旬まで長期間続く。

なお、レンゲの花や蕾での加害が多いと、養蜂業の採蜜にも影響が認められる。

## 4 防除対策

防除薬剤としては、マメ科牧草のゾウムシ類に対して、MEP乳剤及びDEP乳剤が使用できる。レンゲ（緑肥用）のアルファルファタコゾウムシに対しては、プロチオホス粉粒剤が使用できる。薬剤散布は幼虫発生期である4月頃に行うと効果的である。

なお、レンゲ等における農薬使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに養蜂業のミツバチに影響がないよう十分に注意する。



写真1 カラスノエンドウに寄生する幼虫



写真2 幼虫



写真3 成虫